

2020/11/20-2

(うと Q 世話し 実態はそんなもの)

事業でも何でもいいのですが、大きな決断をする時に回顧録や対談等でよく語られる「特筆すべきイベントや要因」があったかというと案外そうではない様な気が致します。

それは無意識の story making か思い違いや思い込みではないでしょうか。

例えば自分の場合、会社を辞めて起業をするに至ったのは、一念発起したからでも、大義を得たと確信したからでもありませんでした。

以前、在籍していた会社の会議で、いつまでたっても終わらない堂々巡りの議論を聞いていた時

「子会社とはいえ、この会社は親会社の金看板で成り立っている。この金看板がなければどうなるか。自分はこの囲いの外にでて、やっていけるのか？今の力で通用するのかな？」

とほんの一瞬、疑問を抱いた事がありました。

ところがその疑問は時を追う毎に次第に膨らみ、遂にはどうなるか、一度試してみたくて仕方なくなってしまったのです。

怖いもの見たさの好奇心。

それで起業を。

或いは

「何故そんなに働くの？」

と時折言われるのですが、これも些細な理由からです。

骨関連の術後 4 年経ちますが、今でも朝起きてから夜寝るまで体のあちこちが痛くて堪らないのです。一時たりとも痛みが消える事はありません。

なので、その痛みを紛らわす為に敢えて忙しくなる仕事を自分にぶつけているような処があります。

率直に言えば、痛みを忘れる為の目暗まし。

他には

「何故こんな田舎に店を開いたの？まあそれが幸いして今コロナ禍、駅前に比べて打撃は少ないようだが」

と言われた際に、あたかも先見の明があるような回答をしておりますが、詰まる処本当の本当は

仕事時間中に痛い体を自宅本社でちょこちょこ休みに帰るのに最短距離物件だったからと、これ又至って詰まらない理由による処が大でした。

これが表向きの話となると、

「一念発起して会社を辞め、起業して寝る間も惜しんで働き詰めに働き、長年の観察から先見の明を培い、今コロナ禍を何とか生き抜いている」

となってしまう訳ですが、

実の処は

「怖いもの見たさの好奇心で始め、痛みを忘れる為に矢鱈と動き回り、たまたま選んだ立地が幸いしただけ」

というのが実情です。

人が言う、表向きの理由や原因等あてにはなりません。

大体が取るに足らないひょんな偶然から始まったり、どうでもいい事が決断の理由だったりしている事の方が多い気がします。なので、成功話を聞く度に

「また言ってらぁ」

と思うだけなのです。